

徹底的な小論文指導で 進路先を広げ、 生徒も保護者も学校も変えてきた

▶ 聖霊中学校・高校(愛知・私立)

取材・文／清水由佳

「生徒がさまざまな体験をして、それを学びに活かし、その学びを将来につなげていく。高校は、その考え方の土台を築く大切な時期です。それは、生徒一人ひとりの生き方をつくることと言ってもいいでしょう。そのために大学進学もあるわけで、聖霊高校が『進学校ではなく進路校』と言っているのも、単に大学進学がゴールではなく、将来や生き方を考える

徹底的に「考える力」を 付けるための小論文指導

竹内先生が現在も力を注ぐAO入試の小論文指導は、小手先のテクニックではなく、「考える力」を伸ばすことに重点が置かれている。先生が指導する日本語総論Ⅱのテキストの巻頭メッセージにも、それが明記されている(ツール1)。

「最近の生徒は、小説を読んでそこから抽象概念を形成していくことが、やや苦手のようです。そのかわり、映像や実験だと理解がしやすく、そこから思考を抽象化していくことが比較的しやすい。そこで、生徒の考える力を極力引き出すために、テーマの前提となる資料には、映像をもつてくるようにしています」

必ず取り上げる映像作品は、「おくりび

進路指導の課題とテーマ

日本宣教のため派遣された聖霊会のシスターたちによって創設された同校は、長年、良妻賢母育成を目指す女子校として中高一貫教育が行われていた。しかし、多くが指定校推薦で進学していた短大がなくなり進学状況に陰りが見え始めた15年前、滑り止め校として不本意入学する生徒が半数以上になり、学習意欲や進学率の低下が課題となっていた。しかも、目標も自尊心もなく、流されていく生徒の対応に追われた当時の生徒指導部長・竹内良彦先生は、この状況を何とかしたいと考えた。

そこで着目したのが、AO入試。自分と向き合い、将来を見据え、「考える力」を伸ばすには、AO入試や国公立大学個別試験の小論文が恰好の教材になると考え、徹底した小論文指導を行った。それによって、国公立やMARCHなど難関大学への進学者が登場し、「自分たちもやればできるかもしれない」という希望が芽生え、校内の雰囲気が変わり始めた。

また、夢を実現し、社会で活躍する先輩たちの存在は、なんとなく上級学校へ進学するのではなく、「生き方」を考える憧れのロールモデルとなった。

そこから同校が掲げるのは、「進学校」ではなく「進路校」という言葉。どこに入学させるかではなく、どのように生きていくか。充実した学校生活を過ごし、未来に向けて生きる力を育み、一人ひとりの生き方を支援する進路指導に力を注ぐ。

○進路状況(2018年3月実績)

大学進学235人、短大進学8人、
専各進学10人、就職0人、その他8人

2013年3月卒では79.9%だった大学進学率が、2018年3月卒では90.0%にまで伸びた。南山大学の学園内推薦もあり、2018年度は58人が南山大学に進んだ。

○School Data

1949年創設／宗教教育・外国語教育・情操教育を教育の三本柱とする中高一貫校。普通科／生徒数：高校692人・中学570人



SFEC委員長・渉外担当
竹内良彦先生

SFECとは、Seirei Future Education Contractionの略。現在、進行中の校舎移転に伴うICT化や、カリキュラム改革など、新たな挑戦を推進する。小論文対策の著書として、『自分だけの物語で逆転合格するAO・推薦入試』『自分だけの思考力で合格する「いのち」思考の小論文』(いずれも学研プラス刊)がある。

と『ALWAYS 三丁目の夕日』千と千尋の神隠し』。いずれも、多様なものの方や題材が詰まっているからだと言う。また、学内で行うさまざまなイベント

ツール1 小論文指導で使用しているテキストの例

ダウンロード可



年間スケジュール



思考のフレーム



巻頭メッセージ

小論文バイブルと名付けた、総論IIのテキスト。冒頭の言葉は、「考える」に真剣に向き合う姿勢を問う。年間スケジュールを見ても、「考える」を徹底したテーマ設定。映像を見て、そこから考える回も必ず実施している。※詳細は、竹内先生著「自分だけの思考力で合格する『いのち』思考の小論文」(学研プラス)でも紹介されている。

や体験も、ひと工夫して小論文指導に活かす。例えば、ボランティア活動の後には、そのボランティア活動を否定するような資料(「ボランティアの犬」という詩)を読ませることで、視点を広げ、体験をさらに深く考えるきっかけにしている。

徹底的に生徒と向き合い
支えていく姿勢を貫く

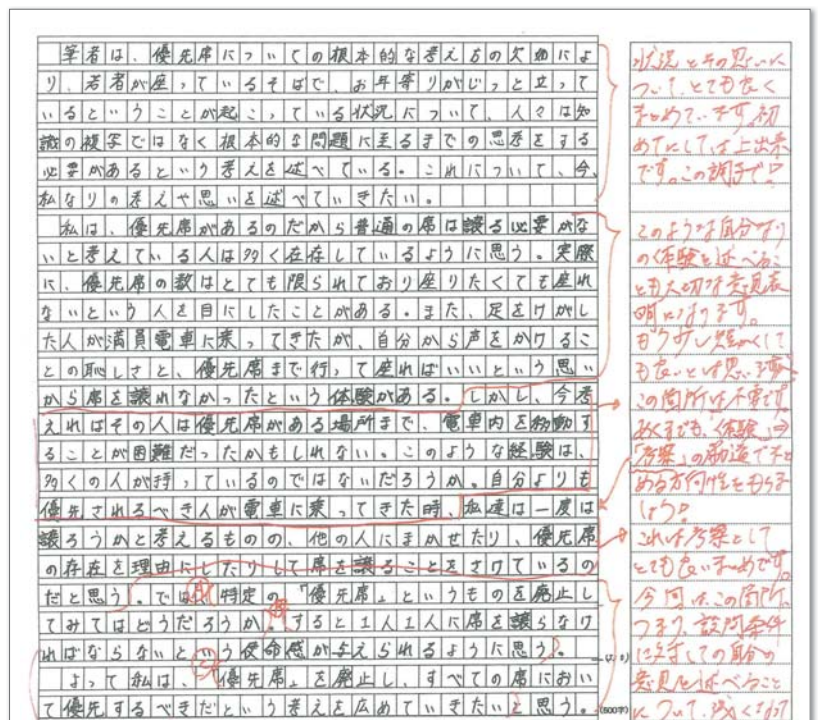
現在、竹内先生が指導する小論文のクラスは約40人。毎週、一人ひとりの小論文の添削(ツール2)をするとなると、一人で担当できる人数は、やはりこれが限界になるといえる。そこで現在は、他3人の先生にも協力を仰ぎ、より多くの生徒の指導ができる体制を整えている。

「そこで重要になるのが、誰もが同じ質で授業や指導が行えるよう、しっかりとした授業案や資料を用意しておくことです(ツール3)。できない先生がダメなのではなく、できるまでサポートしているかということも、重要なポイントです」

新しいことを推進し広げていくには、率先して引張るリーダーシップだけでは、支えるリーダーシップの姿勢が求められるのだ。竹内先生は、進路指導を担う担任向けの研修を積極的に開催したり、進学推進チームを結成して、指導できる先生たちの増加に努めている。その原動力になるのは、「子どもたちのためになることは、何でもやる」という思い。

「教師としてどのように生徒に関わるのか」ということは、スクール・アイデンティティとも重なる大切なポイントです。教師

ツール2 先生の添削事例



生徒一人ひとりの小論文を、毎回添削して返す。赤字でも、「思考」を促すよう徹底している。

である限り、単に大学合格で終わりではつまらないじゃないですか。その先の生き方にも関わるような教育がしたい。そういう想いを、多くの先生と共有したいと考えました」

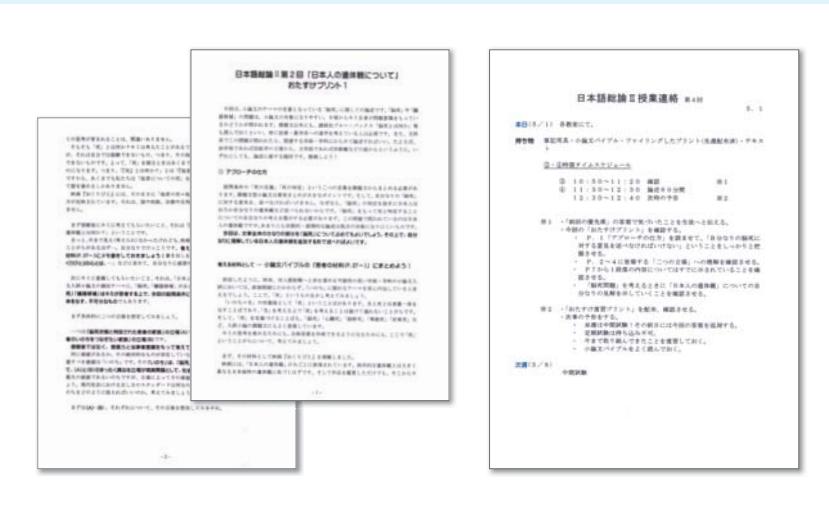
だからこそ、竹内先生は指導の土台として、進路カウンセリングを挙げる。

「重視しているのは、徹底的に生徒の話に耳を傾け、寄り添う姿勢。小論文指導でも、そこは一緒です。こちらが正解をも

っているのではなく、生徒の中にその答えがある。何を考え、どうしたいのか、生徒自身の生き方を一緒に探っていくことが、それぞれの志望校の合格につながる、生徒の未来につながるのです」

実績が出れば、保護者も教員も生徒自身も変わっていく

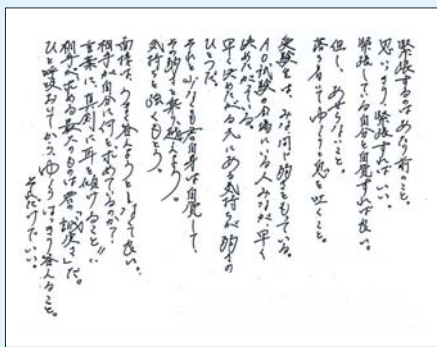
当初、竹内先生が小論文指導を始めたころ、一番懐疑的だったのは、保護者だ



これは、4回目の「日本人の遺体観について」の回の一部。全17枚にわたって、他の先生が指導する際戸惑わないように、授業連絡と数多くの補助資料を準備している。



生徒が残っていた「サクセスノート」
1年間かけての授業とともに、それぞれの生徒が考えたことや調べたこと、書き溜めたものを、各自が「サクセスノート」として残している。なかには、メモの走り書きに「○○なのは？」など、竹内先生が重視する「思考の足跡」が生々しく記録されている。



受験日前日には、一人ひとりに手書きの応援メッセージを渡す。生徒には、これが大事なお守り。

「中学や高校の入試で失敗し、不本意入学。成績も素行も決して良いとは言えない生徒が、AO入試で難関大学を目指すという、まあ、保護者は『そんなことは無駄』『この子には無理』と言います。実際に合格という結果が出て、初めて認めてもらえるのです」
逆転勝利ともいえるような事例には、事欠かない。
「ある難関大学の教育学部を受けた生徒は、入試の際、並み居る偏差値の高いいわゆる進学校の生徒をおさえ、10人中たった1人の合格者になりました。面接で語ったのは、『学校の勉強ができなかった自分だからこそ、クラスの大半の子どもの気持ちが変わる。そういう私が教師になることには意味がある』ということ。そんな、自分の弱みも力にしているのです」

自分の失敗や大変だったこと、苦労したことも含め、丸ごと生きてきた足跡を徒は、入試の際、並み居る偏差値の高いいわゆる進学校の生徒をおさえ、10人中たった1人の合格者になりました。面接で語ったのは、『学校の勉強ができなかった自分だからこそ、クラスの大半の子どもの気持ちが変わる。そういう私が教師になることには意味がある』ということ。そんな、自分の弱みも力にしているのです。そんな、自分の弱みも力にしているのです。

小論文で振り返り、自らの未来を探る。そんな小論文対策を中心とした進路学習の全貌は、一人ひとりが、自分だけの「サクセスノート」という形で記録している（写真参照）。それを後輩が見て、自分の未来への希望としてつないでいく。それまで教員も含め全校にあった、指定校推薦で無難にそこそこやっていくという考え方から、自分なりの未来に挑戦していくという機運も生まれた。
「何より、生徒がプライドをもてるようになったことが嬉しいですね。学校の名前すら言いたくないという雰囲気だったのが、今ではまったくなく、学校を好きになって、部活や勉強に励んでいる。それを身近に実感できるからこそ、もっともっと、思っています」

今後の展望

3つのポリシーの総仕上げ。カリキュラム改革に着手

進路への行き詰まり感から抜け出し、生徒に「自分でもできる」という自信を取り戻させるには、AO入試が恰好の材料だった。そこで出た実績を、入口である中学の入試改革に活かしたのが、中学版AO入試とも言えるようなVAP選考入試。この入試によって、入学希望者は急増した。次に竹内先生が手がけるのは、校舎移転に伴うICT導入やカリキュラム改革。同校が掲げる3つのポリシーの1つ、カリキュラム・ポリシーへの新たな挑戦だ。
「2020年度の入試改革は、大学が大きく変わっていく象徴だと思っています。アカデミズム・辺倒から社会に役立つ、貢献できる大学への大きな価値観の転換。だからこそ、先を見越して、私たちもカリキュラムを変えていかなくては。今までの延長線上に、どういう工夫があるべきか？そこを今、真剣に議論しています」

聖霊中学校・高校 3つのポリシー

アドミッション・ポリシー
(求める児童像)
充実した生活体験をもち、入学後、仲間と協力して充実した学校生活を送ることができる

ディプロマ・ポリシー
(目指す女性像)
社会貢献への道を模索する女性になること

カリキュラム・ポリシー
(目指す教育実践)
すべての教育活動を通じて、生徒が「意味」や「関係性」を育む